様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：３２５０８
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１３２０１３３
研究課題名（和文）　戦前期日本人研究者による朝鮮知の構築
研究課題名（英文）　The Construction of the Intellectual knowledge by Japanese Scholars in the prewar era

研究代表者
吉田　光男（YOSHIDA MITSUO）
放送大学・教養学部・教授
研究者番号：70166974

研究成果の概要（和文）：明治期から第二次世界大戦終了までの時期において日本人研究者が行った、人文社会学的朝鮮研究を、朝鮮に開設された京城帝国大学などの学術機関との関係を重視しつつ分析した。古代史・中世史・近世史・人類学の諸分野における代表的な研究者を個別事例としてとりあげ、学的基盤、経歴、研究成果などを総合的に把握して分析し、彼らの研究の意味と、戦後の学界に対する影響を探究した。

研究成果の概要（英文）：Our project analyzed the Korean studies mainly on humanities from the Meiji era to prewar era of the pre second world war times by Japanese scholars in the academic organs especially the Keijo University in Seoul Korea. We took up representative scholars in the ancient history, the medieval history, the modern history and the anthropology. We analyzed the meanings of their academic achievements with their academic career and so on. We discovered their influences to the academic world of Japan and Korea in the postwar era.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
２０１０年度	2,700,000	810,000	3,510,000
２０１１年度	2,600,000	780,000	3,380,000
２０１２年度	3,200,000	960,000	4,160,000
年度			
総　計	12,300,000	3,690,000	15,990,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：朝鮮史、韓国史、朝鮮、韓国、日本人研究者、京城帝国大学、朝鮮学

１．研究開始当初の背景

(1)戦前期日本人研究者が人文社会学的方法によって蓄積してきた研究資産は、日本や韓国における研究の基礎として第二次世界大戦後、現在まで重要な意味をもってきた。しかし、そのような知的集積に対して従来は、個別具体的な研究の評価にとどまるか、反対に個別具体性を欠いた概括的な評価が先行してきた。そのことがこれらの研究資産の成果を十分に活用して研究を深化させることを妨げていた。

(2)朝鮮学の研究資産が生産された学的状況・背景が等閑視されていたため、理論的枠組みや分析方法の妥当性について、当時の研究水準と知識を基礎とした検証が行われて

こなかった。そのため、これらの研究の到達点と限界について精確な認識が欠如していた。

２．研究の目的
戦前期(1868～1945)日本人研究者による人文社会学的朝鮮研究を、歴史学を中心として総括し、朝鮮知（知識、理論枠、方法、イメージ）構築の実相を明らかにするものである。戦前期日本人研究者の存在的意味とその研究成果の意義を、研究者の知的・学的背景を媒介として読み取り、それが戦後の研究に対して基礎を提供したことの検証を行う。

３．研究の方法
(1)参加研究者を、全近代班（古代史・中世史・近世史）、近代班（思想史・政治史・経済史）、社会班（人類学）の３班に分け、各分野の代表的な日本人研究者を事例として抽出し、その学的背景と研究者としての行動と研究成果を分析し、合同の研究会において総合的な検討を行った。

(2)日本人研究者の知的背景を探究するため、日本と韓国において、戦前期に収集された朝鮮学関係の資料・研究文献の調査を行い、目録を作成して鳥瞰的な把握を行った。これを学界共通の研究資産とする。

(3)日本人研究者の軌跡を検証するために、彼らが活動した日本・韓国・米国において現地調査を行った。その過程で研究的人脈を明らかにした。

４．研究成果
(1)日本人研究者によって日本にもたらされた韓国朝鮮関係文献資料の調査とリスト整理。
京都大学河合文庫、天理大学今西文庫、財団法人東洋文庫、大阪府立中之島図書館、山口県立大学寺内文庫などにおいて朝鮮出自資料の精密な再調査を行い、その将来経緯を明らかにして、各コレクションの資料的価値を明確にした。また、その過程で従来知られていなかった資料を発見するとともに、現行目録の誤りを修正した。とくに中心となったのが河合文庫であり、従来の目録がもっていた多くの誤りを修正するとともに、亡失本についても発見した。

(2)日本人研究者の個別事例研究
①今西龍（京城帝国大学、古代史・中世史）
今西の朝鮮史研究は、藤田亮策などの編纂した『新羅史研究』ほか５冊にまとめられているが、すでに今西春秋氏によって「戦後の京城で散佚してしまった」とされる大量の「未完原稿」にあたると思われる諸資料が発見され分析途上にある。植民地主義と歴史観の観点からの批判を前提としながらも、時代を超えた歴史研究のあるべき姿を考究するうえでその研究的全体像の再検討が必要なことを提起した。天理大学今西文庫の蔵書とあわせることにより、新たな今西龍像を構想する手がかりを得られた。

②河合弘民（京城専修学校、近世経済史・政治史）
京城専修学校幹事として、日本人の朝鮮進出初期に京城において多方面で活躍した河合弘民は、膨大な朝鮮史料を収拾し、死後、京都大学付属図書館に河合文庫によって評価されている。彼が朝鮮と関係をもつにいたった経緯や、蔵書の意味についてはほとんど等閑視されてきた。本研究は、はじめて著作目録（稿）を作成し、朝鮮史研究者としての河合の研究の全体像を把握した。また、生地名古屋および研究者・教育者として活動した東京、ソウルにおける現地調査と文献調査により、生誕から死亡までの詳細な年譜を作成し、朝鮮学研究の過程およびそれを支えた人間関係の様相を把握した。また河合文庫の悉皆調査により、蔵書収集当時における書誌的価値を評価した。

③四方博（京城帝国大学、近世社会史・近代経済史）
四方の戸籍を使用した社会経済史研究を理論的に再検討し、第一に、身分変動に対する理解と誤解を抽出し、第二に、朝鮮王朝末期の韓国経済に関する研究の意義について、欧州留学によって形成された研究方法と理論との関係という観点から検討した。四方は、朝鮮社会停滞論を強調したと理解されているが、近代経済の発達という一つの観点からの評価であり、植民地主義というフィルターを外してみると、その研究の先進性と戦後の日韓両歴史学界に対する、方法論や理論に関する影響が大きい。
　四方の研究を追求する過程で、遺族および京城帝大在籍中の研究秘書から聞き取り調査を行うことができ、文献資料からはうかがうことのできない研究者としての人物像を得られた。

④小田省吾（京城帝国大学、近代政治史）
小田省吾の研究は、近世史・近代史の広範な

分野に広がっていたのにもかかわらず、学務局」「京城帝国大学」「李王職」といった組織としては横の連絡を欠いた部署間を跨いで散在しているために、単体の研究物（倭館・党争・洪景来の乱など）に触れないことはなくとも、その全体像を把握するに至っていなかった。本研究においては、年譜事項および著作一覧の作成によって併合以前から1945年の「引揚げ」期に至るまでの学術・文教行政にどのように関与し続けたかを明らかにした。とりわけ、「朝鮮総督府学務局編輯課と朝鮮古蹟調査事業」、「朝鮮史学会の組織化と学術活動」、「中枢院編纂課と『朝鮮半島史』刊行計画」、「京城帝国大学予科部長／法文学部教授（朝鮮史学第一講座）としての教育・研究活動」、「李王職における『高宗・純宗実録』編纂」、「淑明女子専門学校・淑明高等女学校々長」の各項目について関係史料の渉猟に努め、またその整理を行うとともに、重要史料のテキストデータ化を進めた。またこうした作業によって小田省吾の業績の全体像を把握するとともに、小田が朝鮮史料の体系的な整備を遂行し、その一端は「実録編纂」において顕現するに至ったことを明らかにした。

⑤田保橋潔（京城帝国大学、近代政治史）

京城帝国大学法文学部教授だった田保橋潔が1940年に出版した『近代日鮮関係の研究』は、19世紀後半の朝鮮政治史・外交史研究に先鞭をつけ、現在に至るまで同分野における古典的名著としての地位を保っている。田保橋がその中で、金玉均・朝鮮開化派と福沢諭吉の密接な関係を強調したため、北朝鮮などから「日帝御用学者」と批判されてきた。本研究では、田保橋が金玉均『甲申日録』に対して行った史料批判の意義を再評価するとともに、その意義が解放後の北朝鮮・韓国での朝鮮近代史研究で否定されることになった経緯を再確認した上で、田保橋の研究成果を継承しつつも、解放後／戦後の朝鮮近代史研究とは違う観点から田保橋の研究枠組みの問題点を批判しながら、朝鮮開化派および開化思想研究を進展させるための視点と枠組みを提示した。田保橋前掲書の最大の特徴は、19世紀後半以後変容していく清と朝鮮との宗属関係について周到な目配りをしながら、同時期の日朝関係をその規定性の中に位置づけたことにある。しかし、田保橋の研究には、ともに日本と朝鮮の関係を日本から朝鮮への一方的な影響関係として見る傾向があった。朝鮮開化派に関する史料発掘・研究蓄積が不足していたこともあって、福沢の思想に与えた朝鮮のインパクトが十分に検討されず、そのため福沢と朝鮮問題についても石川幹明『福澤諭吉伝』などに記述された既存のイメージに安易に拠る結果を招いた。本研究は、福沢諭吉と朝鮮開化派が相互に影響を受け合うという関係のもとでの、近代の日本と朝鮮の「文明開化」思想の展開過程とその比較という枠組みを提示した。これにより、一国史的傾向の強い朝鮮近代思想史研究の幅を広げ、また朝鮮史研究の成果をこれまであまり取り込もうとしなかった日本近代思想史の幅を広げることが可能になると期待できる。

⑥秋葉隆（京城帝国大学、人類学・宗教学）

秋葉隆は文化人類学者として朝鮮でおこなった調査の結果から、村落で行われる公的な儀礼においても、また私的なチプ（イエ）でおこなわれる儀礼においても、儒教などの中国伝来の要素によるものと朝鮮に伝統的にあったと思われるシャーマニズム的（巫俗）な側面がみられ、その二つの要素は対立することだけでなく補い合いながら共存しているとみなした。この論は、1970 年代から本格的におこなわれた日本の人類学者による韓国研究でモデル化された「二重構造論」に大きな影響を与え、帝国大学教授としての秋葉隆の立場が反映されていると見なされてきた。しかし、朝鮮の民俗を日本の古俗と比較していることのほうが進化主義的でより問題である。「二重構造論」がモデル化されていく過程を追うことにより日本の人類学による韓国・朝鮮研究のあり方が明確になることを指摘した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

(1)<u>吉田光男</u>

「戸籍の発見―四方博の朝鮮近世社会研究」、『東京経済大学学術研究センター年報』11、2011 年 6 月、116～122 頁、査読無

(2)<u>永島広紀</u>

「韓国統監府・朝鮮総督府における〈旧慣〉の保存と継承」、『東アジア近代史』14、2011 年 3 月、84～95 頁、査読有

(3)<u>李成市</u>

「朝鮮古代史と植民地主義―その克服のための課題」、『ワセダアジアレビュー』9、

2011 年 3 月、18〜23 頁、査読無

(4)永島広紀
「韓国併合百年と韓国・朝鮮近代史研究の現在」、『リベラシオン』140、2010 年 12 月、10〜16 頁、査読無

(5)板垣竜太
「〈東アジアの記憶の場〉に向けて－朝鮮史からの視点」、『歴史学研究』867、2010 年 6 月、57〜67 頁、査読有

〔学会発表〕（計 5 件）
(1)月脚達彦
「近代東アジアにおける「独立」の脈絡」、2012 年度日本政治学会研究大会、2012 年 10 月 7 日、九州大学伊都キャンパス

(2) 吉田光男
「士林派と士禍言説の成立」、東方学会、2011 年 11 月 4 日、日本教育会館

(3) 永島広紀
「越境する歴史学と歴史認識／日本の朝鮮統治と「整理／保存」される古蹟・旧慣・史料」、史学会、東京大学本郷キャンパス、2010 年 11 月 6 日、招待

(4)李成市
「日本の朝鮮植民地支配」、国際シンポジウム「韓国併合」100 年を問う、国立歴史民俗博物館、2010 年 8 月 7 日 8 日、東京大学

(5)李成市
「韓国古代史と植民地主義―その克服のための課題」、韓国古代史学会第 12 回夏季セミナー、韓国儒城、2010 年 7 月 22 日

〔図書〕（計 5 件）
(1) 정지영、이타가키류타(板垣竜太)、이와사키 미노루「기억으로 동아시아 생각하기 동아시아 기억의 장 탐색」、『역사비평』102、.285〜-311 頁、2013.年、韓国語、韓国ソウル、査読有

(2)永島広紀、六反田豊、伊藤幸司他
『寺内正毅ゆかりの図書館 桜圃寺内文庫の研究』、勉誠出版、67〜 96 頁、2013 年、査読無

(3)永島広紀、六反田豊、伊藤幸司他
『寺内正毅ゆかりの図書館 桜圃寺内文庫の研究』、勉誠出版、2013 年、301〜531 頁、査読無

(4)永島広紀、森山茂徳他
『大韓帝国の保護と併合』、東京大学出版会、131〜164 頁、2013 年、査読有

(5)吉田光男、大澤顯浩他
『東アジア書誌学への招待　第二巻』、東方書店、2011 年 、23〜40 頁、査読無

６．研究組織
(1)研究代表者
吉田　光男　(YOSHIDA MITSUO)
放送大学・教養学部・教授
研究者番号：70166974

(2)研究分担者
李　成市（RI SEISHI）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：30242374

秀村　研二　(HIDEMURA KENJI)
明星大学・人文学部・教授
研究者番号：60128724

須川　英徳　(SUKAWA HIDENORI)
横浜国立大学・教育人間科学部・教授
研究者番号：80272798

六反田　豊　(ROKUTANDA YUTAKA)
東京大学・人文社会系研究科・准教授
研究者番号：40220818

月脚 達彦　(TSUKIASHI TATSUHIKO)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号：70272614

永島　広紀　(NAGASHIMA HIROKI)
佐賀大学・文化教育学部・准教授
研究者番号：50315181

板垣　竜太　(ITAGAKI RYUTA)
同志社大学・社会学部・准教授
研究者番号：60361549